

故 鈴木清太郎先生の御逝去を悼む



九州大学名誉教授鈴木清太郎先生は、昭和52年3月3日、柏市気象大学校前の御自宅で御家族の見守られる中、90歳の天寿をまっとうされ、安らかに逝去された。このことは、われわれ日本気象学会関係者はもちろん、すべての学会関係者にとっても哀悼の念を禁じ得ないが、大往生されたということはせめてもの救いであろう。

先生は、明治19年3月10日香川県のご出生で、明治44年7月東京帝国大学理科大学理論物理学科を御卒業、その後、東北大学、秋田県本荘中学校、愛知県第4中学校、松山高等学校を経て、大正11年6月九州帝国大学に助教授として御就任、ただちに農林物理学研究のためドイツ、イギリス、フランスならびにアメリカ合衆国に約3カ年留学、大正14年帰朝とともに教授に昇任され、農学部の気象学統計学講座を担当された。そして研究に教育に大いに活躍され幾多の俊才を育てられ、昭和21年9月定年により退官、在籍中の功績によって九州帝国大学名誉教授の称号を受けられた。

学術上の業績は、火災に関する研究で昭和9年理学博士の学位を得られ、物体の破壊、白色矮星、大気の変動、微気圧変化、雲の高度および全空写真、山越気流、台風の構造に関する研究、火災学など広く物理学の各般にわたった。その他、農業気象学の中に微細気象学を創設し、水田微気象、石垣イチゴと石垣の傾斜角、浸透と

蒸発、凍霜害予防、防風林の研究など数多くの業績をあげられた。また、農学研究者には気象知識を、気象学研究者には農学の知識を啓発され、農学と気象学との境界領域の農業気象学を開拓された。そして昭和35年には農業気象学の研究で第4回日本気象学会岡田賞を受賞された。

先生の御研究は広範にわたるが、物理学的なもの、気象学的なもの、生物学的なもの、天文学的のもの、火災学など全く多彩で、昭和17年に出版された名著「農業物理学」の緒論を見ると、農芸化学の先覚者リービヒに対して農業物理学を唱道され、かなり抱負をもって研究されたことがわかる。これはまた、日本農業気象学会の創始と発展にもつながった。

九州大学内においては、農学部の気象学、統計学の他、法文学部の統計学、工学部の流体力学および理学部の気象学の講義を担当され、さらに大学の運営にも関係された。

いっぽう、学外では学会会議員、測地学および地球物理学委員、日本学術振興会委員、また日本農業気象学会会長を昭和16年創設以来、昭和32年まで歴任され、この方面の学問の発展につくされた。

退官後は、昭和25年までは福岡県吉井町に居住され、九州農業試験場の研究顧問、それ以後は柏市気象大学校前に居を定められ、気象庁研修所および農電研究所の講師ならびに顧問として、先生の学問的情熱で後進の熱心な指導にあたられた。

先生の一貫して全く旺盛な学問の研究は、豊富な知識と自由な発想に基づいた実験研究が多いが、その中ににじみでる独得な着眼を基礎とした真理探究の模範例を示し、われわれを導かれた功績は極めて大きいものである。このことは、気象研究ノート第6巻実験気象（昭和30年）や「農業物理学概説」（相葉書院刊：昭和23年）にもその一端をうかがうことができる。また、令夫人の温かい御援助の下、幅広く円満な御人格は、「降雨術」「理界散策」などの随筆の中にもよくあらわれており、先生の人柄がしのばれる。

先生はかねて「努力すれば迷う」（ゲーテ）と言っておられた。研究というのは疑問を起こして解決しようとするものであるが、迷いと疑いはほとんど同じであるか

ら、迷うて努力するのが研究で、さらに研究していると疑う迷うというわけで、これが研究の本体、科学者の態度であると説かれた。人生は努力すれば迷うが、後には救われるというわけで、これはファウストの一生でもある。

われわれの尊敬する先生は遠い遠い国に旅立たれた

が、残された、円満な人格の上に立った学問的執念を心にとどめ、学問の発展に努力し、その偉業を継承することで先生に報いなければならない。

心から先生の御冥福をお祈り申し上げる。

坂上 務（九州大学農学部）

関西支部第3回例会報告

関西支部の第3回例会は、昭和52年3月17日、舞鶴において開催された。この例会は“しぐれ”をテーマとしており、今年度から3年にわたって行なわれる地方共同研究（気象研究所、大阪管区気象台、舞鶴海洋気象台）と関連させて企画したものである。これらの関連官署、特に会場、宿舎、その他の御手配を頂いた舞鶴海洋気象台に誌上を借りて御礼申し上げる。

会場は舞鶴海洋気象台のある舞鶴港湾合同庁舎の会議室、講演題目は次のとおりであった。参加者は、大阪、京都、彦根をはじめ山陰沿岸気象官署の約50名で、盛会であった。

講演題目

講演者（所属）

- | | |
|--|----------------------|
| 1. しぐれについての統計調査 | 杉浦 茂(舞鶴海洋) |
| 2. 冬季京都府北部におけるシ
ャワー性降水について | 堀口 喜一(舞鶴海洋) |
| 3. 米子におけるしぐれについ
て | 川上 護, 原田 晃
(米子測) |
| 4. しぐれと突風について | 久我雄四郎, 山本二郎
(気象庁) |
| 5. しぐれのレーダエコー解
析 | 杉浦 茂(舞鶴海洋) |
| 6. しぐれ季節の日本海上の雲
分布について | 古橋 重利(大阪管区) |
| 7. 日本海中部における大気安
定度(収束・発散)としぐ
れ(対流性雲の発生・発
達)について | 今井 清(舞鶴海洋) |

- | | |
|-------------------------|-------------|
| 8. 海面の熱収支について | 矢吹文太郎(舞鶴海岸) |
| 9. 日本海の海流による熱輸送
について | 周東 健三() |
| 10. 特別講演 | |

海岸における摩擦効果によ

る流れの変形について 竹内 衛夫(気象研)

講演内容は、関西支部発行の例会講演要旨集第6号に掲載されているので、詳しい紹介は省くこととするが、しぐれの問題は、日本海沿岸の気象官署にとっては、予報上重要であり、また、海洋と大気の相互作用、積雲対流、豪雪機構等に密接な関連を持っているだけに、幅広い興味を含んでおり、討論も活発に行なわれた。

講演を通じて感じられたことは、この問題を本質的に扱うためには、まず、海面下・海面境界層、摩擦層、さらに上層の観測を有機的に行なうことが必要で、これらは、過去の38年豪雪、AMTEXの成果を吸収した上での観測船や沿岸官署の新しい観測成果に期待するところが大きい。幸い、昨年11月には啓風丸を始めとする気象庁4観測船や、沿岸高層、レーダ観測網が展開され、来年度も、その一部は継続して行なわれることになっているので、その観測成果が待たれるところである。これらの解明を得た上で、しぐれ雲の発生・発達、さらに陸上への移動・推移が論ぜられることになろう。

この例会は、まだそこまでの段階を待たず、イントロダクションとしての問題提起の域は出ていないが、将来への示唆は豊富に感じられた。

(地方理事 坂根教閣)